

研究から知財へ



若 者

藤 川 直 人*

A researcher-turned IP professional

Key Words : Intellectual Property, Patent, Patent Attorney,
Pharmaceutical Company

1. はじめに

この度、恩師のご紹介により本誌に寄稿する機会を得た。大阪大学大学院を卒業してまもなく十年、企業研究員として社会人生活をスタートさせた私は、四年前より製薬会社の知的財産部に所属し、医薬特許網の構築とその活用のために日々奔走している。ほとんどが研究者あるいは技術者であろう本誌読者の皆様にとって、私の話は多少畑違いの点も多いと思われるが、大学で培ったサイエンスの、風変わりな活用の一事例としてご参考いただきたい。

2. 学生時代

大学および大学院では、現・大阪大学大学院生命機能研究科の小倉明彦教授に師事し、神経可塑性についての研究を行った。神経可塑性とは、活動状態に依存したシナプス伝達効率の変化やニューロンネットワークのリモデリングといった生理現象の総称であり、記憶や学習に重要な役割を持つと言われている。

記憶のメカニズムを生理学の観点から解明しようとするこの研究分野は、好適な実験系が限られていることもあり、高次レベルでの事象につながる発見や機構解明までの道のりは果てしなく長い。私はマウス小脳顆粒細胞を用いた分散培養系という、同分野でもあまりメジャーではない実験系を用いて研究

を行っていたが、自由闊達な研究室の雰囲気に加え、「面白い現象、新しい現象をまず見つけよう。理屈はそれからだ」という教授の指導方針が性に合っていたのか、論文や学会で研究成果を発表する機会にも多く恵まれ、充実した学生生活を過ごすことができた。

3. 企業の研究職

学生生活は短い。修士課程に入学したかと思ったら、すぐにその後の進路を考えなければならない。博士課程に進んで研究者としての道を究めるか、企業を選ぶか。この過程を経た多くの人々と同様に、私は非常に悩んだ。ちょうど大学での研究が面白いと思い始めた頃でもあり、その一方で企業という全く未知の世界を見てみたいという興味も強かったからだ。悩んだあげく後者を選んだ私は、就職氷河期と言われた年にも関わらず、運よく望んでいた製薬会社の研究職にありつくことができた。研究職を希望していたのは、研究の面白さをすでに肌を感じ始めていたし、大学で学んだこと、得たものを、次のステップに活かせると思ったからだ。

企業の研究は大学で行ってきたものとはまるで違った。入社して約三年は医薬候補化合物の生理活性を評価する部署に所属し、大型のスクリーニング機器を運転して一日に何千という化合物を評価し、マルチウェルプレートの山と格闘する日々は、砂の中に埋もれた砂金を探すような感覚だった。大学の研究とはスケールもスピードも、目的さえも異なる仕事だったが、それはそれで面白かったし、汗水流して働くという充実感があった。やがて研究所内で異動があり、私は糖尿病や循環器系疾患といった疾病の治療薬候補を研究する薬理研究に従事した。以前に比べ医薬により近い部分での仕事であり、それまであまり触れることのなかった in vivo 試験を数多



*Naoto FUJIKAWA

1976年1月生
大阪大学大学院理学研究科生物科学専攻
博士前期(2000年)卒
現在、武田薬品工業株式会社 知的財産
部 課長代理 修士(理学) 医薬特許
網の構築と活用
TEL : 06-6300-6428
FAX : 06-6300-6601
E-mail : Fujikawa_Naoto@takeda.co.jp

くこなす機会が与えられ、とても貴重な時間を過ごすことができた。数年間の間に新規な創薬テーマをいくつか立ち上げることもできたし、何もないところから実験系を構築し、自分の発想を実証に変えていくという研究そのものの面白さをようやく実感できるようになったのもこの頃である。

4. 知財への舵取り

充実した研究生活を送っていた私が、もう一つ興味の触手を伸ばしていたのが知的財産である。新しいテーマを立ち上げるとき、あるいは有用な新規化合物が得られたと思ったときに、他社が有する特許の壁に阻まれたり、リサーチツール特許と呼ばれる広範な権利に自身の実施を阻害されたりする経験を経て、医薬研究にとって知的財産とは何か、よりよい知的財産戦略とは何か、という問題に次第に興味を抱くようになっていた。元々がのめり込むタイプだったのだろう、研究の傍らで知的財産法の勉強を進め、弁理士試験に合格したときには、すでに自身のキャリアモデルを「生物研究の現場に精通した知財のプロになること」と設定していた。

大学で学んだことを企業での研究に活かし、さらにプラスの知識を加えて更なる活躍の場を掴む。そう決断し、私は即座に行動に移った。知財業務は世界各国での戦略立案が必要な比較的グローバルな仕事なので、せっかくなら世界中に市場を持つ企業で働きたい。また、あらゆる産業製品の中で知財戦略がその運命を最も大きく左右するのは医薬品である

から、製薬会社で自身の力を発揮したいと思った。当時働いていた会社も製薬系ではあったが、国内市場のみでプレゼンスを有する会社であったため、前者の希望を実現することは難しかった。「世界的製薬産業」を目指すことを標榜する今の会社は、私の自己実現に最も適合した会社であり、私は転職を決意した。

5. 現在の業務と今後の展望

前述のとおり、あらゆる製品の中で特許の影響を最も大きく受けるのは医薬品である。2006年から2007年の間に、世界中で用いられている優れた治療薬二つの特許が切れた際には、米国における同二製品の売上は一年で10-20%にまで減少した(下図)。日本においても、医療費抑制の観点から特許切れ医薬品のジェネリック切換えが推進されており、特許切れが製品売上に与えるインパクトはますます大きくなると予想される。

このような中、私の勤務する会社でも来るべき主要製品の特許切れに備え、知財戦略の大切さが改めてクローズアップされている。社運を担う製品のライフサイクルを維持するために働くというのはプレッシャーも大きいですが、責任を実感しながら働くことができるのは職業人としての冥利でもあり、日々緊張感を持って働いている。医薬品の開発には十年以上という長い歳月を要するため、求められる知財戦略は十年後、あるいはもっと先の事業計画を見据えたものでなければならず、それを具現化するのは容



(別表) 医薬品と特許切れとの関係

易ではない。とはいえ、先人たちが築き上げた知的財産のおかげで、私たちの会社が事業を存続できていることを思えば、知的財産のバトンをつなげることは私にとっての至上命題であり、レゾンデートルであると思っている。

最後に個人的な余談であるが、昨年、一念発起して禁煙に成功し、ついでに体を鍛え出した。妻に中年腹を指摘されたのがきっかけだったが、やり出してみると意外と面白く、体脂肪率が10%代前半にまで下がった上に、今年の夏、見事トライアスロンを完走することまでできた。すっかり若返って「俺もまだまだ」と思っていた矢先に、恩師より『『若者』というコラムで何か書いて欲しい』と持ちかけられ

たのも何かの縁だったのかもしれない。

そして、このコラムが掲載される頃には、私は社命によりアメリカに赴任していることになっている。海外暮らしは苦労も多かろうが、グローバルな仕事をしたいと知財への転身を決断した私にとって、目標への大切な一歩目である。様々な経験を積んで、今後の仕事へ活かしていきたい。

謝辞

本稿執筆の機会を与えていただきました大阪大学生命機能研究科の小倉明彦教授に感謝いたします。さらに、本文中で触れた組織の関係者皆様に厚く御礼申し上げます。

